

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(20)

リレ一随筆

落花生

(千葉県農業試験場落花生研究室 すずき かずお 鈴木一男)

はじめに

落花生の原産地は南米アンデスの東山麓、ブラジル、ボリビア周辺といわれる。新大陸発見以降世界各地へ伝播し、多くの国々で栽培されている。日本では酒のつまみや菓子原料などに主に利用されるが、世界的には油料作物として栽培されている。

国内の主な栽培地域は関東と南九州で、栽培面積は年々減少傾向だが、1996年は約13,000 ha、そのうちの約2/3は千葉県で栽培されており、千葉県産の落花生は風味の良さでお土産や贈答品として全国の人々に喜ばれている。

千葉県農業試験場落花生研究室

当研究室は農林水産省の指定試験事業により、全国を対象として良質・良食味、多収のほか早熟性、耐病性などを主な育種目標として落花生の育種を行うとともに、県単事業での栽培試験を行っている全国唯一の落花生のための研究室である。

落花生の戦前の品種改良は、主に在来種の系統選抜で行われた。戦後は1947年、国の事業として三重県鈴鹿市の農林省鈴鹿農事改良実験所で品種改良が開始され、人工交配による新品種の育成が始まった。その後、1951年三重県農業試験場に農林省の指定試験事業として移管され、さらに1955年千葉県農業試験場に移管されて、落花生育種試験地が設置された。千葉県では当初成田市で育種事業が始められたが、1958年現在地の八街市(当時八街町)に施設と圃場を移転し、名称を落花生育種研究室と改め、1974年には落



新品種「郷の香」

花生研究室と改称された。

現在研究室では遺伝資源として約1,400品種を保存している。この中には分枝の長短や分枝数の多少、葉の形状や色の濃淡、極大粒種や小粒種、種皮色は白から赤、紫、赤白の斑模様のものなど多くのものが含まれている。中には莢つきが悪かったり、発芽しにくかったりし、保存に苦労しているものもある。また、以前南米で収集した野生種も温室内で保存されている。

これまでの品種改良は、大粒で食味の良いバージニア種と、小粒だが莢数が多いスパニッシュ種との交配による亜種間交雑が主に行われ、多収で良食味の「ナカテユタカ」や、地上部はスパニッシュで莢はバージニアという「ワセダイリュウ」、「タチマサリ」などが育成された。最近の交配親には、昔の良食味品種も利用されている。これまで13品種が育成され、最も新しい「郷の香(さとのか・1995年育成)」は煎豆のほかゆで豆にも適しており、関東や九州での普及が期待されている。

千葉県と落花生

(1)千葉の落花生栽培の歴史

日本に落花生が入ったのは江戸時代といわれているが、実際に栽培されたのは明治になってからである。

千葉県では明治9年に九十九里地域で栽培が始まったが、なかなか普及しなかった。その後、熱心な栽培指導や販路の開拓などの結果、落花生が有利な作物であることがわかると急激に普及し、火山灰土の畑作地帯でも落花生の栽培が広まり、八街周辺の開拓地に大きな産地が形成された。一時期中国からの輸入や戦争のため作付けが減少したこともあったが、戦後は落花生



落花生研究室の全景(右:研究室, 左:調査室)

生の価格高騰により、八街を中心として作付けが急増し、八街は落花生の主集散地となって多くの商人が誕生し、現在の落花生＝八街のイメージの基ができた。昭和30年代後半には県内の畑面積に対する落花生の作付率が30%を超えた。40年代後半からは野菜類への作付転換や農地の改廃などによって落花生の作付けは減少傾向を続けているが、現在でも千葉県は全国一の落花生産地の地位を堅持している。

(2)栽培の実際

千葉県では風味や品質に優れた「千葉半立（通称半立）」と「ナカテユタカ」の2品種が主に栽培されている。5月下旬から6月初旬に播種され、7月初旬から花が咲き始め、花の数は8月をピークに9月にかけて咲き続ける。収穫は9月から10月となる。

収穫された落花生は、畑で莢を上にして10日ほど乾燥（地干し）させた後、円筒状に野積み（ボッチ）して乾いた北風に当ててゆっくり乾燥させる。野積みは北総の畑作地帯の秋から初冬にかけての一つの風物詩となっており、このような独特な乾燥法が風味の良い落花生作りのポイントになっていると思われる。

落花生の主な病害には、葉に発生するもの（褐斑病、黒渋病、そうか病、さび病など）と茎や地下部に発生するもの（茎腐病、根腐病、白絹病など）とがある。また、虫害の主なものはキタネコブセンチュウやコガネムシである。落花生の主な病害虫は、いずれも連作によって発生が増加するため、適期防除とともに他の作物との輪作体系をとることが病害虫防除のポイントとなる。

(3)最近の落花生事情

落花生は省力作物として、また輪作作物として畑作地帯では重要な作物だが、他の野菜類などと比べると農家の手取りは少なく、作付けは減少が続いている。



千葉の風物詩・落花生の野積み（ボッチ）

また、落花生の消費自体も減少傾向にある。

このため、落花生の生産振興と消費の拡大を図るため、ピーナッツの日（11月11日）を設定するなどのキャンペーンが全国で行われ、千葉県では県産の落花生に「ピーちゃん」マークのシールをつけるなどして販売促進を図るとともに、落花生を使った料理コンテストも開かれた。また、掘りたての落花生をレトルト加工する新しい商品の開発も検討されている。

ガット合意で落花生も米同様に今後は輸入が自由化されることとなった。ただ、落花生の加工製品については以前から輸入が自由化されており、最近では国内生産の減少もあって輸入量が増加し、国内で消費されている落花生のうち80%強が輸入されている。外国からの安い輸入品に対抗して国内産の落花生を有利に販売するためには、味の良さをセールスポイントにして、美味しくて収量の多い新しい品種づくりとともに、味の良い落花生の作り方や新しい用途も含めた加工方法の開発研究を進めていくことが必要と考えられる。また、これまでの交配とは違ったバイオテク手法による新しい育種法の開発が大きく期待されている。

本 会 発 行 図 書

『農薬の散布と付着』

日本農薬学会 農薬製剤・施用法研究会 編 B5判 本文 170 ページ

本体 3,300 円（税別） 送料 310 円

施用された薬剤の挙動について、施用法、防除機、散布法・剤型・植物表面と付着の関係・葉面からの取り込み、今後の散布技術の展望を詳述した農薬関係の技術書。

お申し込みは前金（現金書留・郵便振替など）で直接本会までお申し込み下さい。